

小島孝之自叙略歴ならびに著述目録

昭和十八年十月十六日、東京都立川市高松町三丁目において、父陽吉郎、母英子の長男として出生。生後三日目に新生児黄疸を発症し、医師より生育不可の診断を受けるも、辛うじて命を取り留める。

昭和二十三年五月、事故で脊椎骨折。それが元で、脊椎カリエス発症。歩行困難により、二年間寝たきりの生活を送る。

昭和二十六年四月、立川市立羽衣小学校に一年遅れて入学。当時の森豊三郎校長の温情で、通学したのは一年間に数日だけにもかかわらず二年生に進級できた。

昭和二十七年四月、小学二年生より、母の送迎により、ほぼ皆勤。

昭和二十八年四月、小学三年生より、ほぼ自力で通学できるようになる。

昭和三十年三月、小学五年。カリエス再発。それまでの病院を変え、生涯の主治医となった佐藤久医師により、発病後初めて抗生物質の投薬を受ける。休学がちに時々登校。翌年春には症状が軽快し、六年生に進級。

昭和三十二年三月、立川市立第六小学校卒業（在学中に校名改称）

昭和三十二年四月、立川市立第二中学校入学

昭和三十五年三月、立川市立第二中学校卒業

昭和三十五年四月、東京都立立川高等学校入学

昭和三十六年二月、カリエス再度再発。高校を休学し、一年間入院。抗生物質（カナマイ）の投与を受け続ける。

が、副作用で耳が聞こえにくくなり、記憶力も減退した。

昭和三十七年四月、一学年下の学年に復学。同級生たちと相計り、落語研究会を作る。

昭和三十九年三月、東京都立立川高等学校卒業。

昭和四十年四月、東京大学文科Ⅲ類に入学。入学後二週間目に、肋膜炎発症、休学。母が、大学に休学届を出しに行ったところ、学生課の窓口で、正式な休学にせず、友人にノートを借りて、学期末試験だけ受けたらよいとのアドバイスをもらう。クラス担任の杉山好先生はこれを知り、同級生にノートを提供してくれるように呼びかけてくださり、多くの同級生が、自分のノートを綺麗にまとめたものを作成して提供してくれた。

杉山先生と同級生たちのおかげで、休学せずに駒場の二年間を乗り切れた。

昭和四十二年四月、文学部国語国文学科に進学と同時に、カリエス三度目の再発、入院。ちょうどその頃、大学紛争勃発。大学は開講できない状態になった。その間に私は、根治を目指して切開手術を行うことにし、患部の骨を削り取り、肋骨の骨を取って、脊椎に埋め込む手術を行う。これにより、ほぼ半年間寝たきりの状態が続いたが、幸い手術は成功した。十年間再発しなければ根治したと言われる。回復後は、寝たきり患者の病室を訪問し、落語の口演などで慰問する。

昭和四十四年九月、復学。紛争が安田講堂の攻防を最後に一応収束した。東大では、四十四年後期の半年を以て一年間とみなすという特例措置を決めた。この年の始めに私は完治して退院し、自宅で静養中だったので、復学の手続きをしたが、学生課で、在学中の学生に限る特例なので、休学中の学生は対象外である、来年の四月を待つて復学するか、九月から四月までは卒業に必要な在学期間に含めずに今復学するかのどちらかを

選択せよと言われ、リハビリを兼ねて半年余分に在学する方を選んだ。

昭和四十五年四月、東京大学落語研究会に入会。顧問の飯島友治先生・三遊亭小圓朝師に付き多くの事を学ぶ。

普通より長い在学期間を利用して、時間をかけて卒業論文に取り組むことにし、テーマを落語の祖とも言われる説経の名手「無住」に決めた。

昭和四十七年三月、東京大学文学部国語国文学専修課程卒業。

昭和四十七年四月、東京大学大学院人文科学研究科修士課程に入学。

昭和四十八年五月、最初の論文「雑談集巻四をめぐって」を『国語と国文学』に発表。卒業論文の一部だった。

以後の数本の論文はすべて卒業論文から切り出したもの。

この頃から国語研究室助手の安田尚道氏（後、青山学院大学教授）のお供をして、『三宝絵』東大寺切の調査を始める。安田氏の紹介で、田中親美邸での古筆研究会にも出席し、春名好重・萩谷朴先生等の先達の知遇を得る。

昭和五十年三月、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。

昭和五十年四月、東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学。私立武蔵高等学校講師（五十三年三月まで）。

東京大学医学部付属助産婦学校講師（六十年三月まで）

昭和五十二年四月、博士課程二年修了時に、実践女子大学文学部に専任講師として着任。

当時は、歌人でもある木俣修先生が学科主任で、他に、三谷栄一、阿部秋生、浦山政雄、阿部吉雄、福島邦道、内尾久美、岡村和江、新田大作、佐藤昭夫、田中有という諸先生が居並んでおり、そこへ私と、東京教

育大学から筑波大学への移転に反対されて退職なさった分銅惇作先生との二人が新任に迎えられたのであった。

昭和五十二年五月、『撰集抄』形成私論」を『国語と国文学』に発表。無住関係以外の初めての論文。これは修士論文から切り出したものだった。

昭和五十三年三月、阿部知子と結婚。

昭和五十三年七月、第四回日本古典文学会賞受賞。主に、卒業論文と修士論文を基にした論文が評価の対象だったので、研究者として何とかやっていけそうだとのほのかな自信を持つことができた。

昭和五十五年四月、立教大学文学部助教役に転じた。

前年に在職中に亡くなった長野嘗一先生の後任だった。宇野義方、小田切進、松崎仁、井上宗雄、前田愛、守屋省吾の諸先生、それに学部は一般教育部だったが、日本文学科としては同僚だった佐藤善也、平山城児、加藤定彦の三先生がおり、私より若いのは加藤さんだけだった。こちらも錚々たる顔ぶれであったが、立教は聖公会のミッションスクールで、自由、平等、博愛をモットーにしており、かつ、大学紛争を教員と学生が徹底的に話し合うことで解決したという自負があり、明るく、自由に物が言え、風通しの良いところだった。文学部では、紛争以来の習わしで、四十代以前の若手教員が学科の枠を越えて、自由に意見交換する若手の会というのがあり、飲みかつ食いながら大学の未来について意見を交わし合う機会があった。当時のメンバーは、木村靖二（ドイツ史、後、東大教授→大学評価・学位授与機構教授）・松平信久（教育学、後、立教学院院长）、関正勝（組織神学、後立教学院理事・聖公会神学院校長）、押見輝夫（心理学、後、立教大

学総長）等々というメンバーで、腹藏なく語り合えたのはそれまでにない貴重な経験であった。

四月、文部省国文学研究資料館国文学文献資料調査員（昭和五十七年三月まで）

七月に長女涼子誕生。

昭和五十六年四月、文部省国文学研究資料館文献目録委員（平成六年三月まで）

昭和五十七年四月、武蔵大学人文学部日本文化学科非常勤講師（六十三年三月まで）

昭和五十九年四月、跡見女子大学文学部国文学科非常勤講師（六十一年三月まで）

昭和六十一年四月、成蹊大学文学部日本文学科非常勤講師（平成元年三月まで）

昭和六十二年四月、立教大学文学部教授となる。

平成三年四月、聖心女子大学文学部国語国文学科非常勤講師（平成五年三月まで）

平成三年四月、跡見女子大学文学部国文学科非常勤講師（平成五年三月まで）

平成四年四月、日本文学科長になるとともに、八学科の科長会の座長を務める。

東京大学文学部国文学科非常勤講師（平成五年三月まで）

平成六年九月、立教大学を退職。

平成六年十月、東京大学文学部教授に転じた。

立教大学文学部日本文学科非常勤講師（平成十年三月まで）

平成七年四月、東京大学大学院人文科学研究科教授に配置換え（大学院大学に移行）

宇都宮大学教育学部非常勤講師（九月まで、集中講義）

平成七年五月、跡見女子大学文学部国文学科非常勤講師（平成八年三月まで）。和田英道氏急逝の後を急遽引き受けたもの。

平成八年四月、実践女子大学大学院国文学専攻非常勤講師兼文芸資料研究所非常勤研究員（平成十年三月まで）

平成九年四月、跡見女子大学文学部国文学科非常勤講師（平成十一年三月まで）

平成九年十一月、輔仁大学（台湾）の招聘を受け、大学院の集中講義に訪台。

平成十年四月、慶応義塾大学大学院文学研究科非常勤講師（平成十一年三月まで）

お茶の水女子大学文教育学部非常勤講師（平成十一年三月まで）・財団法人東京大学出版会評議員（平成十五年三月まで）

平成十一年三月、東京大学より、博士（文学）の学位を授与。

平成十一年四月、東京大学とジュネーブ大学（スイス）の交流協定の一環として、六か月間、客員教授として、スイスに赴任。

長期滞在を利用して、スイス各地、リヒテンシュタインを始め、フランス（パリ・シャルトル等）・イタリ  
ア（ミラノ・フィレンツェ等）・ドイツ（ヴュルツブルク・ケルン・ボッフム等）など、アルプスの山々と  
美術館を中心に歩いた。

平成十二年四月、慶応義塾大学大学院文学研究科非常勤講師（平成十三年三月まで）

平成十二年七月、東京大学留学生センター長に選任される。（平成十四年六月まで）

留学生センター長の役回りとして、「文部科学省外国人留学生の選考等に関わる調査・研究協力者」、「文部

科学省私費外国人留学生学習奨励費給付制度受給者選考委員」、「文部科学省ヤング・リーダーズプログラム推進協議会委員」などを務めた。留学生課長から、東大は恩恵を受ける学生が多いので絶対に断らないでくれと釘を刺されたので、逃げるわけには行かなかった。フランスのルノー財団が、全国十大学程度を選んで、フランスへの留学を援助するというプランを実現するための協議会にも相当な回数出席し、学長サイドとの橋渡しもしなければならなかった。これらすべてが、ジュネーブ大学に滞在したことがきっかけだった。

財団法人吉田育英会評議員（平成十九年七月まで）もセンター長として拝命。YKKの創立者が私財を投じて設立した奨学金給付団体で、主に留学生に対する奨学金を援助する。

平成十三年四月、財団法人日本古典文学会評議員（平成十八年三月まで）

平成十三年十一月、国際シンポジウム「東西交流と日本―世界からみた日本、日本からみた世界」（東京大学・

財団法人日本国際教育協会共催）を、実行委員長として、東京国際交流館にて実施。

平成十四年三月、九州大学留学生センター外部評価委員を務める。

平成十六年四月、成城大学文芸学部・同大学院文学研究科非常勤講師（平成十八年三月まで）

平成十七年四月、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館外部評価委員（平成二〇年十一月まで）

平成十八年三月、東京大学大学院人文社会科学系研究科教授を定年により退職

平成十八年四月、成城大学文芸学部教授

武蔵大学人文学部日本・東アジア文化学科非常勤講師（平成二十一年三月まで）

平成十八年五月、東京大学名誉教授

平成十九年二月、大阪外国語大学日本語日本文化教育センター外部評価委員（三月、実地調査及び報告会。四月、報告書公開）

平成十九年六月、成城大学民俗学研究所員（平成二十六年三月まで）

平成十九年十一月、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館研究水準外部評価委員（平成二十年六月まで）

平成二十年四月、早稲田大学大学院文学学術院非常勤講師（平成二十一年三月まで）

四月、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館運営会議委員（現在に至る）

十一月、成城大学評議員（平成二十五年三月まで）

平成二十三年四月、成城大学大学院文学研究科長（平成二十五年三月まで）。前年末に前研究科長の小林義武先生が病氣入院されたことにより、三月まで研究科長代行を務めたが、正式に選出されてしまった。

平成二十六年三月、成城大学文芸学部を定年退職

（所属学会）

中世文学会・説話文学会・仏教文学会・和歌文学会・中古文学会・和漢比較文学会・西行学会・東方学会・東京大学国語国文学会・立教大学日本文学会・成城大学国文学会・絵解き研究会（解散）

（著述目録）

単著・編著



『古筆切で読む くずし字練習帳』（单著）

平成十八年六月 新典社

『説話の界域』（单編）

平成十八年七月 笠間書院

『三宝絵を読む』（小林真由美・小峯和明と共編）

平成二十年二月 吉川弘文館

『無住―研究と資料』（監修）

平成二十三年十二月 アルム

### 論文その他

平成十八年七月「説話の界域 総論」『説話の界域』笠間書院

平成十八年十二月「賞の意義―過去と未来へ―」『日本古典文学会会報別冊 日本古典文学会のあゆみ』財団法人

### 人日本古典文学会

平成十九年三月「民間伝承における土地の創生と神をめぐる」『成城国文学』23号

平成十九年三月「怪異の語り方―『今昔物語集』卷二十七を中心に―」『成城国文学論集』31輯

平成十九年三月「異常気象と桜―つれづれなるままに―」『成城教育』第135号、成城学園教育研究所

平成十九年七月「『沙石集』の諸本と無住の唱導」『説話文学研究』42号

平成十九年九月「芥川と『今昔物語集』」『芥川龍之介全集』（第2次）月報9、岩波書店

平成十九年九月「中世文芸と唱導」『解釈と鑑賞』第72巻10号

平成二十年二月「田中親美翁写東大寺切について」『三宝絵を読む』、吉川弘文館

平成二十年三月「中世文学における対話」『第31回国際日本文学研究集會會議録』、国文学研究資料館

- 平成二十年三月「古筆切拾塵抄・続(二)―入札目録の写真から―」『成城国文学』24号
- 平成二十年三月「『宇治拾遺物語』―「笑い」の語り方」『中世文学の回廊』、勉誠出版
- 平成二十年四月「貴重書紹介 伝冷泉為相筆『拾遺百番歌合』二卷」『図書館暦』100号
- 平成二十年十二月「古筆と絵巻」『国文学解釈と鑑賞』第73巻12号
- 平成二十年十二月「中世私家集の断簡三種―『公経集』・『道玄集』・存疑『親清四女集』等について―」『成城文芸』205号
- 平成二十一年三月「古筆切拾塵抄・続(二)―入札目録の写真から―」『成城国文学』25号
- 平成二十一年三月「古筆切の中の連歌切二種」『成城大学国文学論集』32輯
- 平成二十二年一月「捏造された伝承」『民俗学研究所ニュース』87
- 平成二十二年三月「模写・記録・贋作―古筆切研究の悩ましさ―」『成城文芸』210号
- 平成二十二年三月「某家所蔵古筆切等について―中院切・小松切・長柄切その他―」『成城国文学論集』33輯
- 平成二十二年三月「古筆切拾塵抄・続(三)―入札目録の写真から―」『成城国文学』26号
- 平成二十三年三月「某家所蔵古筆切等について(続)」『成城国文学論集』34輯
- 平成二十三年三月「古筆切拾塵抄・続(四)―入札目録の写真から―」『成城国文学』27号
- 平成二十四年三月「古筆切拾塵抄・続(五)―入札目録の写真から―」『成城国文学』28号
- 平成二十四年六月「断片から探る中世文学―佚文・断簡および目録と中世文学研究―」『中世文学』第57号
- 平成二十五年三月「古筆切拾塵抄・続(六)―入札目録の写真から―」『成城国文学』29号

平成二十五年三月「成城大学所蔵古筆手鑑『も、ちどり』概要」『成城国文学論集』35輯

平成二十六年三月「古筆切拾塵抄・続（七）——入札目録の写真から——」『成城国文学』30号

平成二十六年三月「説話を読み解く——宇治拾遺物語の戦略——」『成城国文学論集』36輯

\*成城大学着任以前の著書・論文等については、『説話の界域』（平成十八年七月刊）所収「小島孝之著作目録」に記載してあるので、ここには成城大学着任以後のものに限定した。

